

「神の家族」

(創世記 3 : 8 - 21、マルコによる福音書 3 : 20 - 35)

神様とともに暮らしていた人間は、食べてはいけないと言われていた木の実を食べてしまいました。木の実を食べたら「賢い」者となるはずだったのに、彼らがどうなったかと言うと、裸であることに気づくのです。旧約聖書では「裸」は「弱さ」を意味します。人が木の実を食べて獲得した賢さとは、神が素晴らしいものとして造られた肉体を、弱く恥ずかしい「裸」だと考える賢さだったのです。そしてその賢さゆえに、互いのありのままの裸=弱さを認め合うことができなくなった人は、腰をいちじくの葉で覆い、互いの裸を隠しました。

神との約束を犯した結果はそれだけではありませんでした。人は神の足音が聞こえたとき、恐れて身を隠すようになりました。これもまた、「裸」ゆえです。人は互いに裸でいられなくなるばかりか、神の前でも裸で立つことができなくなってしまったのです。ここで「足音」とされている単語は「声」とも訳せます。「神の声を聞く」ことは、本来は嬉しいことであつたはずなのに、神の声を聞いたとき、人は恐れ、隠れるようになってしまったのです。こうして、人と人、そして神と人との間に決定的な断絶が生まれました。

木の実を食べた責任をアダムはイブに、イブは蛇に転嫁しました。ここにもまた「裸」を受け入れられなくなった人の姿があります。自分の弱さを認めることができなくなった人間は、自分の責任を他者に転嫁するようにもなりました。それゆえ人は、防御のために自分を次々に覆うようにもなるのです。

今日の福音書に登場する、主イエスの身内や律法学者の姿は、裸であることを恐れる人間の姿に他なりません。身内の悪い評判は、自分の裸を隠したい人間にとっては耐えられないものです。権威の側に立っていた律法学者にとっては、身にまとっている権威を剥がれたら裸になってしまいますから、なんとかそれを守ろうとします。こうして、身内も、律法学者も「裸」であることを守ろうとするゆえに、目の前の主イエスを正しく見つめることができません。互いの裸を隠そうとする目では、主イエスが何者かわからないのです。

主イエスは、そんな人間に向かって「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と問いかけます。そして、「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」と言われます。神は裸であることを恥じるようになった人間であっても無関心でいられず、「どこにいるのか」と問いかけ、呼び求めてくださる神です。その神の御心とは、人が神のもとで互いの裸=弱さを恥とせず、命を祝福しあつて生きることです。神と人、人と人とが再び共に生きるその世界では、もはや人は血縁を超えて、互いを神の家族、兄弟姉妹と呼びあつて生きるのです。